

『白氏文集』における漢語動詞形成漢字の訓読

— 神田本・金沢文庫本・天理図書館本を対象として —

柚木 靖史

一 研究の目的と方法

『源氏物語』のように和語を基調とする作品の中で、漢語は、文章内容を伝えるうえで重要な働きを担っている。その最も大きな働きは、和語では表現することのできない意味を補い、伝えるべき内容を明確にすることであろう。筆者は、『源氏物語』の、特に一字からなる漢語動詞に着目して、『源氏物語』のような和文のなかで漢語動詞が果たす意味について論じてきた。そして、それぞれの漢語動詞が、多かれ少なかれ漢字漢語の和語化を経て、多義的で、一般的な意味になりやすい和語動詞の特性を補うべく、限定的で、専門的な意味を表すのに適した漢語動詞を利用してきたことを述べた。

『源氏物語』に使われる漢語動詞の語幹を形成する漢字漢語（本稿ではこれを漢語動詞形成漢字と称する）の成立について考

えるとき、古代の中国文献と漢語動詞形成漢字の意味を比較することは重要な作業と考えられるが、古代中国文献の漢語動詞形成漢字をどのように読んだか、つまり訓読という翻訳行為のなかで漢語動詞がどのように使われていたかを確認することも日本における漢語動詞の成立過程や働きを考えるうえで、重要な作業であると考ええる。なぜなら、訓読における漢語動詞が、『源氏物語』のような和文で使用される漢語動詞の成立と関連付けられる可能性も存するからである。

そこで、本稿は、『源氏物語』と書写年代が近く、『白氏文集』の訓点資料の中で最も古い『神田喜一郎博士旧蔵白氏文集』（以下、神田本と表記する^①）を基礎資料にして、漢語動詞形成漢字を対象に、漢文訓読において、それが漢語動詞と和語動詞のどちらで読まれているかを検討し、漢文訓読の漢語動詞と和文の漢語動詞の関係について考える。（本稿では、以下、漢語動詞の訓を漢語動詞読みと表現し、和語動詞の訓を和語動詞読みと表

現する。)さらに、白氏文集の訓点資料として、その後(3)に書写された加點資料である『金沢文庫本』、『天理図書館本』(以下、それぞれ金沢本、天理本と表記する)についても、神田本の訓との比較を行い、白氏文集の三種類の訓点資料(神田本・金沢本・天理本)における漢語形成漢字の読みの実態について明らかにしたい。

なお、本稿で対象とする漢語動詞形成漢字は、漢字一字のみで形成されるものに限っている。本来なら、二字以上からなる漢語動詞形成漢字も対象とすべきではあるが、『源氏物語』の二字からなる漢語動詞形成漢字は、神田本ではすべて漢語動詞読みであることから、和語動詞読みとの比較考察の対象から除いた。

二 漢語動詞の認定のための作業

神田本には、表1に示す『源氏物語』の漢語動詞形成漢字⁽⁴⁾35字のうち、表2に示す12字の漢語動詞形成漢字が使用されている。⁽⁵⁾

表2は、まずは翻刻文を通読しながら用例を確認し、個々の例について写真によって、別筆かどうか確かめた。翻刻文では、例えば「感(ズル)」のように補読により、漢語動詞として読んでいる箇所がある。このように、訓点の加點状況によって、そ

の読み方が分からない例は、表2の用例数から除いた。

表1 『源氏物語』の一字漢語動詞と用例数

服	按	孝	調	念
1	1	3	15	67
用	要	辞	制	奏
1	1	3	12	60
論	勘	拝	請	誦
1	1	3	8	48
	感	秘	信	具
	1	3	7	36
	死	弄	臆	怨
	1	3	6	34
	動	先	興	屈
	1	2	4	25
	難	練	困	領
	1	2	4	24
	襟	和	講	啓
	1	1	3	15

表2 『源氏物語』と一致する神田本の一字漢語動詞

信	感
2	12
調	死
1	11
啓	奏
1	9
要	服
1	4
論	和
1	4
	制
	3
	按
	2

以下、漢語動詞読みか和語動詞読みかの判断は次のように行った。まず、声点・音合符・音読符が付された例は、漢語動詞読みが明らかなので用例として採取した。さらに、資料中の複数の用例において、その活用語尾から漢語動詞読みと判断できるものは、これを採取した。さらに、観智院本類聚名義抄(以下、名義抄と表現する)にサ行に活用する和語動詞が掲載されていないものについては、これを漢語動詞読みとして採取した。

(1) 声点・音読符により、漢語動詞読みと判断した例

「按」に去声の声点がある例

・按(去) シ、「左」「アンシ」(角)『左、「アンシ」』て(卷三

251行目)

「啓」に上声の声点がある例

・啓(上) す(卷三 329行目)

(2) 送り仮名や名義抄の訓から漢語動詞読みと判断した例

例えば、漢語動詞形成漢字の「感」には、声点等が付されていないが、名義抄に掲載された動詞の訓に、「ウゴク イタム カナフ ホム カフル」(僧中 三八) が掲載されているが、この中にサ行に活用する和語動詞が無い。また、次に示すように、未然形が「せ」で、完了の助動詞「り」の前が已然形(命令形)の「せ」であることにより、四段・下二段ではなく、サ変ということが知られる。

・感(セシメ)は『角、「セシメハ」』『イ、「セシメハ」』(卷

三 61行目)

・感す『イ、ス』(卷三 235行目)

・感(スル) こと『イ、スルコト』(卷三 236行目)

・感セリ(卷三 12行目)

三 漢語動詞と和語動詞の読み分けの有無

本節では、神田本において、漢語動詞読みと和語動詞読みとの間に何らかの読み分けが認められるかどうかについて確認する。

漢語動詞読みと和語動詞読みの両方が存する漢語動詞形成漢字としては、「啓」「調」「対」「征」がある。ただし、「対」「征」は、『源氏物語』では、漢語動詞として使用されていない。

(1) 「啓す(ケイス)」と「啓く(ヒラク)」

後掲の用例1に示すように、漢語動詞で読まれた動詞「啓」字は、「申し上げる」という意味である。「啓」の主体は王子で対象者は聖人である。一方、和語動詞で読まれた動詞「啓」字は、「ヒラク」という動詞で読まれており、用例2、用例3いずれも「開く」という意味である。用例2は、主体が天子で、目的語が齒である。用例3は、主体が不特定の誰かで、目的語が貪心である。

このように、「ケイス」と読まれた漢語動詞の意味と、「ヒラク」と読まれた和語動詞の意味は異なることがわかる。よって、動詞「啓」字を、漢語動詞として「ケイス」と読むか、和語動詞として「ヒラク」と読むかの判断は、漢文中の動詞「啓」字の意味によったと考えられる。『源氏物語』に現れる「啓す」の意味は、「申し上げる」という意味なので、神田本で「啓」を漢語動詞で読んでいる背景には、和文でも使用される「啓す」とかわりがあるかもしれない。『源氏物語』の「啓す」と、神田本の「啓す」の意味を比較すると、『源氏物語』の「啓す」が、東宮や三后を対象とするのに対して、神田本の「啓す」は、聖人を対象とするという点で、対象に違いが認められる。ただし、対象を貴人という範囲に広げれば、『源氏物語』の「啓す」と神田本の「啓す」の意味には、共通点が認められる。

- 1 曲（カキヨク）、終（ハ）て王（ワウシ）・子（コ）、聖人（セイジン）に啓（ケ）（上）す。（卷三 329行目）
- 2 ヌ（タチ）（天子）之が為（タメ）（去）に、微（ミ）に『左、スコシ又ヒソ（カニ）』、齒（ハ）を啓（ヒラ）ク（卷四 149行目）
- 3 誰（タレ）か黠（タラシ）（入声）・虜（ロ）の貪（タメシム）・心（ココロ）を啓（ヒラ）クことを知（シ）（ラ）む。
（卷四 177行目）

(2) 「調ず（テウス）」と「調ふ（シラフ、トトノフ）」

用例4の漢語動詞で読まれた動詞「調」字は、「調律する」という意味である。主体は、梨園の弟子で、対象は律呂である。一方、用例5の和語動詞で読まれた動詞「調」字は、「演奏する」という意味である。主体は演奏者で、対象は五弦である。

用例4は、漢語動詞として読まれる他に、異訓として「トトノヘ」「シラフ」の和語動詞の訓も付される。特に、「シラフ」には合点が付されている。用例4は、「調律する」という意味を表す動詞「調」字を漢語動詞で読んだと考えられるが、異訓も存したようである。なぜ、異訓が存するのか、特に「シラフ」に合点が付されていることについては、その理由が不明である。ただ、神田本の加点者は、当該箇所動詞「調」字を漢語動詞で読んでいると判断する。したがって、神田本では、「調律する」という意味では漢語動詞で読み、「演奏する」という意味では和語動詞「シラフ」で読んでいると考える。

神田本の「調ず」の意味が「調律する」であるのに対して、『源氏物語』の「調ず」は、「整える」という意味である。「調律する」というのは、音に限定されるものの、「整える」という意味としても考えられることから、『源氏物語』の「調ず」の「整える」という意味に近い。神田本で和語動詞「シラフ」と読まれた「演奏する」という意味は、『源氏物語』の「調ず」には認

められない。このことから、『源氏物語』の「調す」と神田本の「調ず」は、意味的に関連性が認められる。

4 梨・園の弟子、律呂を調す『イ、ト、ノへ 又シラフ』。

(卷三 116行目)

5 五・絃、一・々に君か為に、調フ。(卷三 289行目)

(3) 「対す(タイス)」と「対ふ(ムカフ)」

用例6の動詞「対」字は、「対面する」という意味である。主体は天子で、対象者は蜜子の謁見者である。これを漢語動詞で読んでいる。用例7の動詞「対」字も「対面する」という意味であり、同じく漢語動詞で読んでいる。用例6と同じく、主体は天子で、対象者は蜜子の謁見者である。用例8の動詞「対」字も「対面する」という意味である。用例6や7と同じく、主体は天子で、対象者は蜜子の謁見者である。しかし、用例8では、右訓が「ムカフ」という和語動詞であり、左訓が漢語動詞である。左訓の漢語動詞には合点が付されている。写真による判断なので厳密ではないが、私が見るところここでの右訓と左訓は同筆のようである。この見方が正しいとすれば、まず右訓で和語動詞で読み、その後、左訓で別の読みを書き記したと考えられる。そして、後に書き記した漢語動詞の読みを推奨する

ためにそこに合点を記したのであろう。このように考えると、用例8の「対面する」という意味の動詞「対」字も最終的には漢語動詞と読んだことになる。

これに対して、用例9の動詞「対」字の意味は、「向く」という意味で、ここでは、人心がお互いに向き合うという内容が書かれている。すなわち、用例6から用例8の動詞「対」字が「対面する」という意味なのに対し、用例9の動詞「対」字は、「向く」という意味で、他とは意味が異なることになる。用例9の主体は「心」という抽象的事象であり、そのほかが人という有情物であるところに、大きな違いがある。なお、「対す」は、『源氏物語』で使われていないが、「対面す」は使われている。国語文でも、「対す」は、「向く」よりも「対面する」の意味で使われる。このように、動詞「対」字の意味の違いを反映して、用例9の動詞「対」字は、「ムカフ」と読み分けたと考えられる。

6 衣(訓)を賜ヒ、食(音、角)を賜(ヒ)て時を移(ス)マてに對(去)セリ。(卷三 322行目)

7 怜(シ)、宰相の紫(音、角)を拖キ、金・章を佩(テ)ヘルことを『イ、(オヒ)て』『左、オヘトモ』日を隔(テ)て唯、對(去)(スル)こと『イ、「スルコト」』
(一・刻なる(コト)を『イ、「ナルコトヲ」聞(ク)(卷三

323 行目

8 時を移^(トキヲシユル) (スマ) てに^(ニ) 対^(タイ)ヘルこと『左、対^(タイ)スルコト』
得^(ウケ)可^(カ) (ウ) 不^(フ)。(卷三 322 行目)

9 独^(ひとり)、人^(ひと)・心^(こころ)の相^(アヒムカ)・対^(たい)ヘル時^(トキ)有^(アル) (リ)、咫^(シゼ)尺^(シツ) (ノ)
「之^(これ)」 間^(ま)モ、料^(へい) (ル) こと 能^(アタ) (ハ) 不^(フ)。(卷四 331 行目)

(4) 「征^(セイ)す (セイス)」と「征^(ユク)く (ユク)」

10 の動詞「征」字には、声点が差され、活用語尾「セ」「ル」は完了の助動詞が合点付きで記される。異本の訓として、サ変活用の活用語尾「スル」も記す。このことから、「征」は、漢語動詞として読んだことが分かる。11 の動詞「征」字には、「ユク」という和語動詞の訓が記される。名義抄には、「征」に「ユク」の訓がみられる。10 の「征」の意味は、「征伐する」で、ここでは「蛮族を征伐した」ことを表す。11 の「征」は、「征伐するために行く」という意味で、ここでは雲南に戦いに行くことを免れたことを表す。

さらに、10 と 11 の「征」に付けられたそれぞれの訓を、同筆か別筆かという観点からみると、写真を見る限りでは、10 の「セル」の訓、11 の「ユク」の訓は、同筆かと思われる。同筆であるとする、同一加点者が、異なる箇所「征」を漢語動詞と和語動詞の別の訓で読んだことになる。そして、その読みの

基準は、「征」の意味の解釈によったと考えられる。「征す」の意味としては、「征伐する」が一般的で、訓点資料のみならず日本の国語文にも用例が見える。しかしながら、「行く」という意味での「征す」は、国語文では使われていないようである。なお、『大漢和辞典』によれば、「征」の意味に「行く」「天子の命を報じて無道をうちこらしめる」があり、漢語動詞で読んだ10の「征」を「こらしめる」の意味で解釈し、和語動詞で読んだ11の「征」を「行く」の意味で解釈したと思われる。

10 前^(マヘ) (平^(ヘイ)、角^(カク) 後^(コト) (去^(キョ)、角^(カク) (去^(キョ)、左^(サ)、サ (キ) ノ (チ)』
蛮^(マン) (音、角^(カク) (音) を 征^(セイ) (平^(ヘイ)、セル『イ、スル』者^(モノ)、
千^(セン)・万^(マン)・人^(ニン)、行^(ユキ) (キ) て『イ、「ユイテ」一『角^(カク)「リモ』』
『イ、リモ』 廻^(カ) (角^(カク) 『イ、「ヘル』』こと无^(ム)シト『イ、
「シ』』。(卷三 170 行目)

11 此^(コレ) 從^(ヨク)、『イ、「ヨリ』』、始^(ハジメ)て雲^(ウン)・南^(ナン)に征^(セイ)クこと免^(メヌ)レタ
リ『左、ユルサレ (タリ)』。(卷三 173 行目)

(5) 漢語動詞形成漢字の読み分けについて

『源氏物語』と神田本との間で、比較して考察することができ、漢語動詞が「啓す」と「調ず」に限られており、少ない例からは断定することは難しいが、「啓す」「調ず」を見る限りにお

いて、神田本の漢語動詞が『源氏物語』の漢語動詞の意味に近いことから、神田本の漢語動詞形成漢字を漢語動詞として読む際には、『源氏物語』のような和文でも使われる漢語動詞の影響を受けていると考えられる。すなわち、漢語動詞形成漢字に複数の意味があつて、読み分けが必要な際には、その意味に、和語中心に表現される『源氏物語』に使われるような、おそらくはかなり一般化した漢語動詞と意味が近い場合には、漢語動詞として読み、その意味と異なる場合には和語動詞で読むといった読み分けがなされていたのではないかと推察される。

四 諸本における漢語動詞形成漢字の読みの比較

四―「啓」「調」「対」「征」の神田本・金沢本・天理

本の読み方

ここでは、三節で取り上げた漢語動詞形成漢字「啓」「調」「対」「征」について、金沢本⁽⁷⁾と天理本の読みを確認する。

(1) 「啓」の訓

「啓」については、神田本で、「申し上げる」という意味では漢語動詞で読み、「開く」という意味では「ヒラク」と和語動詞で読んでいたが、金沢本、天理本では、以下のように読んでいる。

まず、金沢本では、「申し上げる」という意味では、例1のように「マウス」という和語動詞として読み、「開く」の意味では例2、例3のように「ヒラク」という和語動詞で読んでいる。神田本との違いは、「申し上げる」という意味の動詞「啓」字を、漢語動詞ではなく、和語動詞で読んでいることである。

また、天理本では、「申し上げる」という意味では例4のように「モウス」と和語動詞として読み、「開く」の意味では例5、例6のように「ヒラク」と和語動詞で読む。このように、天理本の動詞「啓」字の意味と和語動詞と漢語動詞の対応関係は金沢本と同じである。

〔金沢本〕

- 1 曲・終(リ)テ王・子聖人ニ啓(マウス) (巻三 311行目)
- 2 天・子之カ為(ニ)微ヒソカニ齒ヲ啓ク(ヤシヤク) (巻三 147行目)
- 3 誰カ・知ン黠・慮貪・心ヲ啓クコトヲ(クワッ・カッ・リヨフ) (巻四 176行目)

〔天理本〕

- 4 曲・終(リ)て王(平声)・子(上声)聖・人(平声濁) (モウサク) 414頁4行目
- 5 々々(天子)之か為に微に齒を啓ク(ヒツカ・ハ・ヒラ) (巻三 388頁5行目)
- 6 誰カ・知ラム黠サカシ 胡八反・慮(上声)貪(平声輕)・心(平声輕)ヲ啓クカ(ヒラ) (タム) 447頁3行目

(2) 「調」の訓

「調」については、神田本では、「整える」という意味では漢語動詞で読み、「演奏する」という意味では「シラフ」と和語動詞で読んでいた。これに対して、金沢本では例7のように「整える」という意味の「調」に「ラク」とあり、この仮名だけでは読みが不明である。「演奏する」という意味では、例8のように、「フ」の送り仮名があることから、「シラフ」と和語動詞で読んでいると考えられる。天理本では、例9、例10のように「整える」「演奏する」どちらの意味でも、「シラフ」という和語動詞で読んでいる。

〔金沢本〕

7 梨・園ノ弟・子律・呂ヲ調ラク (卷三 120行目)

8 五・絃一・々君カ為ニ調フ (卷三 273行目)

〔天理本〕

9 梨 (平声)・園 (平声) 弟・子律・呂を調フ (卷三 383頁 6行目)

10 五・絃一・々ニ君か為ニ調フ (卷三 408頁 3行目)

(3) 「対」の訓

「対」については、神田本で、「対面する」という意味では漢語動詞で読み、「向く」という意味では「ムク」と和語動詞で読んでいる。これに対して、金沢本も天理本も、「対面する」という意味の「対」も、「向く」という意味の「対」も、「ムカフ」という和語動詞で読んでいる。

〔金沢本〕

11 衣ヲ賜ヒ食ヲ賜ヒテ時ヲ移 (ス) マテニ対ヘリ。(卷三 303行目)

12 怜「憐」可宰・相ノ紫ヲ拖キ金・章ヲ佩テ日ヲ朝「隔

テイ」唯対ヘル一・刻ナルコトヲ聞 (カ) シンコトヲ。(卷

三 304行目)

13 時ヲ移 (スマ) テニ対 (カ) ヘルコト亦タ得可 (カラ) 不 (卷三 303行目)

14 唯人ノ・心ノ相 (ヒ)・対ヘル時有り。咫 (去声)・尺之間 (ヲモ) 料ルコト能 (ハ) 不 (卷四 327行目)

〔天理本〕

15 衣を賜ヒ食 (入声) を賜フて時を移スマテ対ヘリ。(卷三 413頁 2行目)

16 憐(ム)可宰(上声)・相(去声)紫(去声)を拖(ヒ)キ金

(平声輕)・章(平声)を佩(ヒ)テ日を隔(ヘ)テ、唯(タ)・聞(ク)一・刻

(入声)ナルを対(ム)カヘルを(卷三 413頁3行目)

17 時を移(ス)マテニ対(ム)カヘルこと得(ウ)可(カラ)不(卷三 413

頁3行目)

18 独(ヒトリ)人(ヒト)心(コ)ノ相(ア)ヒ・対(ム)カヘル時(トキ)有(ア)リ。咫(シ)(上声)・尺(セキ)(入声輕)

ノ之間(ア)ヒタモ料(ハカ)ラコト能(ア)ハ不(サレ)(卷四 467頁1行目)

(4)「征」の訓

神田本の「征」は、漢語動詞で読んだ例と和語動詞「ユク」で読んだ例とがあり、これらは、「征」の意味の違いによって読み分けられていると考えられる。

神田本の当該箇所「征」の読みに対して、次に示すように金沢本でも、漢語動詞と和語動詞「ユク」で読まれており、神田本と同じ読みである。天理本の当該箇所の「征」の読みも、神田本、金沢本と同じように、漢語動詞と和語動詞で読んでいる。神田本、金沢本、天理本、それぞれの訓がどのような底本によったかは不明であるが、「征」の意味によって漢語動詞と和語動詞に読み分けていることが考えられる。

「金沢本」

19 前・後蜜を征スル者ノ、千・万・人行テ一リモ・廻ルコト

無シト(卷三 165行目)

20 茲徒(リ)始テ雲・南ニ征クコトヲ免サレタリ。「左、マヌ

カレス」(卷三 168行目)

「天理本」

21 前(平声)・後(去声)蜜(ヲ)征スル者、千(平声)・

万(去声濁)・人(平声)、行テ一リモ・廻ルこと無シ(卷

三 391頁5行目)

22 此徒(リ)始(テ)雲(平声)・南(平声)(二)征クこと

を免カレタリ。(卷三 392頁1行目)

四―二 神田本、金沢本、天理本の漢語動詞形成漢字の読み

今までの考察で、「啓」「調」「対」「征」という限られた漢語動詞形成漢字であるが、それぞれの読みについて、次のような傾向がみられた。

①「啓」「調」「対」「征」は、漢語動詞形成漢字の意味の違いによって、漢語動詞と和語動詞とに読み分けられていることが考えられる。読み分けの基準としては、『源氏物語』の

ような国語文に使用されている漢語動詞の意味と類似する場合は漢語動詞で読まれ、異なる意味の場合は、和語動詞で読んでいるようである。

- ② 神田本に比べて、金沢本、天理本では、和語動詞で読まれやすい傾向にある。

- ③ 神田本、金沢本、天理本それぞれの諸本における漢語動詞形成漢字の読み方は、基本的には一致するところが多い。

以上のような結論を得たのであるが、対象が『源氏物語』で使われる漢語動詞形成漢字の範囲に限ると漢字数が少ないので、なお対象を漢語形成漢字全般に広げて確認する必要がある。この点を踏まえて、次節では、対象範囲を神田本の全ての漢語動詞に広げて、考察することとする。

五 神田本、金沢本における漢語動詞読みと和語動詞読みの特徴

前節では『源氏物語』で漢語動詞として使われる漢語動詞形成漢字を対象に限定して、神田本での読みと『源氏物語』や他の国語文での漢語動詞の意味との関係について考えてきた。本節では、考察対象とする漢語動詞形成漢字を、神田本で漢語動詞読みされているすべての漢語動詞形成漢字に広げ、金沢本において本文の同じ内容の個所で使われる漢字が漢語動詞読みと

和語動詞読みどちらで読まれているかということについて確認することにする。

訓点資料の各所の読み方は、諸本によって異なることが多い。別の訓点資料で読み方が異なる原因は、おそらくは粗点となる家訓の違いや、時代差などによると考えられる。したがって、もとより考察対象が、白氏文集の三種の訓点本だけであり、かつ漢語動詞形成漢字だけでは、読み方が諸本によって異なる実態とその原因を解明することは難しいところもあるが、訓点資料における漢語動詞形成漢字と漢語動詞読み、和語動詞読みを読み分けの有無の実態について考える糸口としたい。

以下、神田本と金沢本での、漢語動詞読み、和語動詞読みの特徴について分類する。ただし、神田本もしくは金沢本いずれかの読みが不明であったり、本文自体がなかったりといった理由により、対応箇所の訓が拾えない場合は、考察対象から外すことにした。

(1) 神田本が漢語動詞読みのみで、金沢本に和語動詞読みのみがある

1 「和」(神) 漢語／(金) ヤハラク 2 「称」(神) 漢語／(金) イフ 3 「点」(神) 漢語／(金) サス 4 「生」(神) 漢語／(金) ナル・ナス 5 「対」(神) 漢語／(金) ムカフ 6

「対」(神) 漢語／(金) ムカフ 7 「啓」(神) 漢語／(金) マウス 8 「聞」(神) 漢語／(金) キコユ 9 「書」(神) 漢語／(金) シルス 10 「駕」(神) 漢語／(金) カク 11 「印」(神) 漢語／(金) アナヤキアリ 12 「奉」(神) 漢語／(金) タテマツル 13 「通」(神) 漢語／(金) カヨフ

「例えば、右の例1で、「和」(神) 漢語／(金) ヤハラク」としたのは、「和」という漢語動詞形成漢字が神田本では「和ス」のように漢語動詞で読まれ、金沢本では「ヤハラク」のように和語動詞で読まれていることを示す。なお、濁点は原文に基づき、表記していない。」

(2) 神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本に和語動詞読みのみがある

1 「操」(神) 漢語・アヤツル／(金) アヤトル 2 「調」(神) 漢語・シラフ／(金) ト、ノフ・シラフ 3 「側」(神) 漢語・ソハタツ／(金) ソハム・ソハタツ 4 「宿」(神) 漢語・ヌ／(金) イヌ 5 「休」(神) 漢語・ヤム／(金) ヤム 6 「転」(神) 漢語・メクル／(金) メクル 7 「替」(神) 漢語・スタル／(金) スタル 8 「煦」(神) 漢語・イキツク・アキトフ／(金) イキツク 9 「推」(神) 漢語・モハラニス／(金) トル 10 「唱」(神) 漢語・トナフ／(金) トナフ 11 「接」(神)

漢語・マシハル／(金) マシハ 12 「録」(神) 漢語・シルス／(金) シルス 13 「落」(神) 漢語・オツ／(金) オツ 14 「着」(神) 漢語・キル／(金) キ 15 「献」(神) 漢語・タテマツル／(金) タテマツル 16 「激」(神) 漢語・ハケマス／(金) ハケマス 17 「比」(神) 漢語・クラフ／(金) 読みは不明だが訓読符あり 18 「熟」(神) 漢語・ミノル／(金) ミノル 19 「虐」(神) 漢語・シヘタク／(金) ソコナフ・シヘタク 20 「食」(神) 漢語・ハム／(金) クラフ 21 「叱」(神) 漢語・イサフ／(金) キサフ 22 「語」(神) 漢語・モノイフ・モノカタリス／(金) モノカタリス 23 「勒」(神) 漢語・シルス／(金) シルス 24 「彈」(神) 漢語・タ、ス／(金) タ、ス 25 「護」(神) 漢語・マホル／(金) マホル 26 「荒」(神) 漢語・スサム・コフ・アル／(金) スサム

「例えば、右の例1で、「操」(神) 漢語・アヤツル／(金) アヤトル」としたのは、「操」という漢語動詞形成漢字が神田本では「操ス」のように漢語動詞で読まれている箇所と「アヤツル」のように和語動詞で読まれている箇所があり、金沢本ではいずれも「アヤトル」のように和語動詞で読まれていることを示す。」

(3) 神田本に漢語動詞読みのみがあり、金沢本に漢語動詞読みと和語動詞読みがある

1「陳」(神) 漢語／(金) 漢語・ノフ 2「禁」(神) 漢語／(金) 漢語・イサフ 3「屯」漢語／(金) 漢語・アツム 4「存」(神) 漢語／(金) 漢語・ラル 5「屯」(神) 漢語／(金) 漢語・アツム 6「食」(神) 漢語／(金) 漢語・クフ 7「直」(神) 漢語／(金) 漢語・トノヒス

(4) 神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本にも漢語動詞読みと和語動詞読みがある

1「記」(神) 漢語・シルス／(金) 漢語・シルス 2「労」(神) 漢語・イタハル／(金) 漢語・ネキラフ 3「持」(神) 漢語・モツ／(金) 漢語・モツ 4「奉」(神) 漢語・タテマツル・ウケタマハル／(金) 漢語・ウケタマハル 5「策」(神) 漢語・シルス／(金) 漢語・シルス 6「聘」(神) 漢語・ヨフ／(金) 漢語・ムカヘヨフ 7「駕」(神) 漢語・カク／(金) 漢語・カク 8「長」(神) 漢語・マサル／(金) 漢語・マサル 9「長」(神) 漢語・マサル／(金) 漢語・マサル

(5) 神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本に漢語動詞読みのみがある

1「哭」(神) 漢語・ナク／(金) 漢語 2「長」(神) 漢語・ソヒユ／(金) 漢語 3「貢」(神) 漢語・タテマツル／(金) 漢語 4「労」(神) 漢語・イタハル／(金) 漢語 5「禄」(神) 漢語・ヤル／(金) 漢語 6「哭」(神) 漢語・ナク／(金) 漢語 7「決」(神) 漢語・サクル／(金) 漢語 8「食」(神) 漢語・クラフ／(金) 漢語

(6) 神田本が漢語動詞読みのみで、金沢本にも漢語動詞読みのみがある

1「戮」(神) 漢語／(金) 漢語 2「散」(神) 漢語／(金) 漢語 他 75例

「以下に当該漢字のみを示す」

(卷三)

3 陳 4 散 5 哭 6 感 7 婦 8 作 9 詠 10 復 11 服 12 信 13 和 14 通 15 哭 16 配 17 制 18 禁 19 死 20 征 21 感 22 聞 23 通 24 按 25 封 26 貢 27 謁 28 論 29 献 30 通 31 愛 32 奏 33 征 34 通 35 賀 36 感 37 感 38 濟 39 服 40 語 41 語

(卷四)

42 化 43 对 44 題 45 勅 46 愛 47 朝 48 称 49 愛 50 要 51 作 52 害 53 奏 54 勝 55 称

56 勅 57 称 58 配 59 鎮 60 感 61 属 62 没 63 存 64 題 65 属 66 詔 67 存 68 失 69 奏
70 幸 71 婦 72 封 73 擬 74 変 75 決 76 賀 77 奏

(7) 神田本が和語動詞読みのみで、金沢本に漢語動詞読みのみがある

1 「称」(神) イフ / (金) 漢語 2 「減」(神) キユ / (金) 漢語
3 「奉」(神) タテマツル / (金) 漢語 4 「讃」(神) ホム / (金) 漢語

(8) 神田本が和語動詞読みのみで、金沢本に漢語動詞読みと和語動詞読みがある

1 「任」(神) タフ / (金) 漢語 / タフ

神田本と金沢本の漢語動詞形成漢字の漢語動詞読みと和語動詞読みとの関係についてみると、神田本で漢語動詞読みのみをする場合が97例あり、これに対して金沢本で漢語動詞読みをする例が77例、和語動詞読みをする例が13例、漢語動詞読みと和語動詞読みが混在する例が7例あり、神田本で漢語動詞読みのみで読んだ場合、金沢本でも漢語動詞読みする例が大半を占める。(97例中84例) また、神田本で漢語動詞読みと和語動詞読みが混

在する場合は43例あり、金沢本で漢語動詞読みのみが8例、和語動詞読みのみが26例、漢語動詞読みと和語動詞読みとの混在が9例であり、神田本で漢語動詞読みと和語動詞読みが混在する場合は、金沢本は和語動詞読みが半数以上を占める。さらに、神田本が和語動詞読みのみの場合、金沢本が漢語動詞読みのみが4例、漢語動詞読みと和語動詞読みとの混在が1例である。また、ここでは具体的な用例数を挙げていないが、神田本が和語動詞読みをみの場合、金沢本も和語動詞読みの場合は、多数存する。

このような状況から、神田本で漢語動詞形成漢字を漢語動詞読みした場合は、基本的には金沢本でも漢語動詞読みをするのであるが、金沢本には一部、和語動詞読みをする例があり(1) 13例、(2) 26例、神田本に比べて金沢本は和語動詞読みをするという傾向が認められる。ただし、(7) が4例、(8) が1例と、神田本が和語動詞読みのみで、金沢本が漢語動詞読みした例も少ないながら存する。() 内の数字は、前述の分類番号を示す。

六 天理本における漢語動詞形成漢字の読みの特徴

この節では、神田本と金沢本に天理本を加えて考察していく。

(1) 神田本が漢語動詞読みのみで、金沢本に和語動詞読みのみがある

1 「和」(神) 漢語／(金) ヤハラク／(天) ト、ノヲル 2
 「称」(神) 漢語／(金) イフ／(天) イフ 3 「点」(神) 漢語
 ／(金) サス／(天) 漢語 4 「生」(神) 漢語／(金) ナル・
 ナス／(天) ナス 5 「対」(神) 漢語／(金) ムカフ／(天)
 ムカフ 6 「対」(神) 漢語／(金) ムカフ／(天) ムカフ 7
 「啓」(神) 漢語／(金) マウス／(天) マウス 8 「聞」(神)
 漢語／(金) キコユ／(天) キク 9 「書」(神) 漢語／(金)
 シルス／(天) 漢語 10 「駕」(神) 漢語／(金) カク／(天)
 カク 11 「印」(神) 漢語／(金) アナヤキアリ／(天) 漢語・
 カナヤキアリ 12 「奉」(神) 漢語／(金) タテマツル／(天)
 漢語 13 「通」(神) 漢語／(金) カヨフ／(天) 漢語

13 例のうち、金沢本で和語動詞読みでも、天理本では漢語動
 詞読みをする例が5例あることから「点」「書」「奉」「印」
 「通」、金沢本より天理本の方が漢語動詞読みをする傾向がある
 といえよう。金沢本と天理本の訓の異同は、「聞」で「キコユ」
 (金)「キク」(天)のように一部違う訓があるものの、ほぼ同じ
 訓である。

(2) 神田本に漢語動詞と和語動詞読みがあり、金沢本に和語動
 詞読みのみがある

1 「操」(神) 漢語・アヤツル／(金) アヤトル／(天) アヤツ
 ル 2 「調」(神) 漢語・ト、ノフ・シラフ／(金) シラフ／
 (天) シラフ 3 「側」(神) 漢語・ソハタツ・ソハム／(金)
 ソハム・ソハタツ／(天) ソハム 4 「宿」(神) 漢語・ヌ／
 (金) イヌ／(天) イヌ 5 「休」(神) 漢語・ヤム／(金) ヤ
 ム／(天) ヤム 6 「転」(神) 漢語・メクル／(金) メクル／
 (天) メクル 7 「替」(神) 漢語・スタル／(金) スタル／
 (天) スタル 8 「煦」(神) 漢語・イキツク・アキトフ／(金)
 イキツク／(天) アキトフ 9 「推」(神) 漢語・トル・モハラ
 ニス／(金) トル／(天) トル 10 「唱」(神) 漢語・トナフ／
 (金) トナフ／(天) トナフ 11 「接」(神) 漢語・マシハル／
 (金) マシハル／(天) 漢語 12 「録」(神) 漢語・シルス／
 (金) シルス／(天) シルス 13 「落」(神) 漢語・オツ／(金)
 オツ／(天) オツ 14 「着」(神) 漢語・キル／(金) キル／
 (天) キル 15 「献」(神) 漢語・タテマツル／(金) タテマツ
 ル／(天) 漢語・タテマツル 16 「激」(神) 漢語・ハケマス／
 (金) ハケマス／(天) 漢語・ハケマス 17 「比」(神) 漢語・
 ナラフ／(金) 訓読符のみあり／(天) 漢語 18 「熟」(神) 漢
 語・ミノル／(金) ミノル／(天) 漢語・ミノル 19 「虐」

(神) 漢語・シヘタク／(金) ソコナフ・シヘタク／(天) 漢語・シヘタク 20「食」(神) 漢語・ハム／(金) クラフ／(天) クラフ・ハム 21「叱」(神) 漢語・イサフ／(金) イサフ／(天) イサフ 22「語」(神) 漢語・モノイフ・モノカタリス／(金) モノカタリス／(天) カタラフ 23「勒」(神) 漢語・シルス／(金) シルス／(天) 漢語 24「彈」(神) 漢語・タ、ス／(金) タ、ス／(天) タ、ス 25「護」(神) 漢語・マホル／(金) マホル／(天) マホル 26「荒」(神) 漢語・アル・マトフ・スサム／(金) スサム／(天) スサフ・アル・マトフ

神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本が和語動詞読みのみの場合、天理本は、19例が和語動詞読みのみで、3例が漢語動詞読みのみ、4例が漢語動詞読みのみと和語動詞読みがある例である。このことから、天理本は、金沢本より漢語動詞で読む傾向が強いといえそうである。神田本・金沢本・天理本の異同をみると、26例中14例が、同じ訓であることから、三本間で異同は多くないという傾向が認められる。特に、神田本で読まれた訓は、金沢本か天理本かのいずれかの訓に用いられている。神田本になく、天理本・金沢本のみにある訓としては、3「側」の「ソハム」、20「食」の「クラフ」があるが、この例だけで金沢本と天理本の近さを言うことは難しいであろう。

神田本と金沢本のみにある訓としては、22「語」の「モノカタリス」と26「荒」の「アル」があり、神田本と天理本のみにある訓としては、8「煦」の「アキトフ」と26「荒」の「マトフ」があり、金沢本と天理本のみにある訓としては、20「食」の「ハム」があるが、これらは、全体から見れば少数である。

(3) 神田本に漢語動詞読みのみがあり、金沢本に漢語動詞読みと和語動詞読みがある

1「陳」(神) 漢語／(金) 漢語・ノフ／(天) 漢語 2「禁」(神) 漢語／(金) 漢語・イサフ／(天) 漢語 3「屯」(神) 漢語／(金) 漢語・アツム／(天) アツム 4「存」(神) 漢語／(金) 漢語・ヨル／(天) 漢語 5「屯」(神) 漢語／(金) 漢語・アツム／(天) 漢語・アツム 6「食」(神) 漢語／(金) 漢語・クフ／(天) 漢語・クラフ 7「直」(神) 漢語／(金) 漢語・トノヒス／(天) 漢語

金沢本で漢語動詞読みと和語動詞読みがある例でも、1「陳」、2「禁」、4「存」、7「直」のように、天理本では漢語動詞読みのみがあることから、金沢本よりも天理本のほうが漢語動詞読みをする傾向があるといえそうである。また、金沢本と天理本の訓の異同をみると、金沢本・天理本ともに同じ訓

(3・5「屯」の「アツム」がある一方、金沢本と天理本で異なる訓(6「食」の「クフ」と「クラフ」)もあり、訓の異同から、金沢本と天理本の訓の近似性を判断することは難しい。

(4) 神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本にも漢語動詞読みと和語動詞読みとがある

1記(神) 漢語・シルス／(金) 漢語・シルス／(天) シルス
 2労(神) 漢語・イタハル／(金) 漢語・ネキラフ／(天) 漢語
 3持(神) 漢語・モツ／(金) 漢語・モツ／(天) 漢語
 4奉(神) 漢語・タテマツル・ウケタマハル／(金) 漢語・ウケタマハル／(天) 漢語
 5策(神) 漢語・シルス／(金) 漢語・シルス／(天) 漢語
 6聘(神) 漢語・ヨフ／(金) 漢語・ムカヘヨフ／(天) 漢語
 7駕(神) 漢語・カク／(金) 漢語・カク／(天) 漢語
 8長(神) 漢語・マサル／(金) 漢語・マサル／(天) 漢語
 9長(神) 漢語・マサル／(金) 漢語・マサル／(天) 漢語・マサル

神田本と金沢本が、ともに漢語動詞読みと和語動詞読みとがある場合、天理本でも漢語動詞読みが認められ、和語動詞読みだけの例は見られない。天理本で漢語動詞読みだけの例が3例

見られる。神田本・金沢本・天理本ともに同じ和訓である例が5例見られる。2「労」は、神田本が「イタハル」で金沢本が「ネキラフ」で天理本が漢語であり、6「聘」では、神田本が「ヨフ」で金沢本が「ムカヘヨフ」、天理本が「ムカフ」で、それぞれ訓が異なっている。

(5) 神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みがあり、金沢本が漢語動詞読みのみである

1哭(神) 漢語・ナク／(金) 漢語／(天) 漢語
 2長(神) 漢語・ソヒユ／(金) 漢語／(天) 漢語
 3貢(神) 漢語・タテマツル／(金) 漢語／(天) 漢語
 4労(神) 漢語・イタハル／(金) 漢語／(天) 漢語
 5禄(神) 漢語・アル／(金) 漢語／(天) 漢語
 6哭(神) 漢語・ナク／(金) 漢語／(天) 漢語
 7決(神) 漢語・サクル／(金) 漢語／(天) 漢語
 8食(神) 漢語・クラフ／(金) 漢語／(天) 漢語・クラフ

神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みとがあり、金沢本で漢語動詞読みのみの場合、天理本は8例中7例が金沢本と同じく漢語動詞読みのみである。神田本で漢語動詞で読んでいる場合、金沢本も天理本も漢語動詞読みであることを示す。

(6) 神田本が漢語動詞読みのみで、金沢本に漢語動詞読みのみがある

(天理本に漢語動詞読みのみがある。)

1 戮 2 散 3 陳 4 散 5 哭 6 感 7 帰 8 作 9 詠 10 復 11 服 12 信 13 和 14 通
15 哭 16 配 17 制 18 禁 19 死 20 征 21 感 22 聞 23 通 24 按 25 封 26 貢 27 謁 28 論
29 献 30 通 31 愛 32 奏 33 征 34 通 35 賀 36 感 37 感 38 濟 39 服 40 語 41 語 42 化
43 封 44 題 45 勅 46 愛 47 朝 48 称 49 愛 50 要 51 作 52 害 53 奏 54 勝 55 称 56 勅
57 称 58 配 59 鑠 60 感 61 属 62 没 63 存 64 題 65 属 66 詔 67 存 68 失 69 奏 70 幸
71 帰 72 封 73 擬 74 変 75 決 76 賀 77 奏

(天理本に漢語動詞読みと和語動詞読みがある。)

52 害 (害ス・ソコナフ)

ここに分類される神田本、金沢本、天理本の対応箇所は、77例中76例が天理本でも漢語動詞読みのみで、残りの1例(52「害」が漢語動詞読みその他に和語動詞読みがある。このことから、神田本において漢語動詞で読まれている漢語動詞形成漢字は金沢本・天理本でも漢語で読まれているといえる。

(7) 神田本が和語動詞読みで、金沢本に漢語動詞読みのみがある

1 「称」(神) イフ／(金) 漢語／(天) イフ 2 「滅」(神) キユ／(金) 漢語／(天) キユ 3 「奉」(神) タテマツル／(金) 漢語／(天) ツカウマツル 4 「讃」(神) ホム／(金) 漢語／(天) 漢語・ホム

金沢本で漢語動詞読みのみのある4例は、天理本には和語動詞読みがある。このことは、先に述べた天理本のほうが金沢本より漢語動詞読みがされやすいことと矛盾しているようでもある。ただ、今までの分類(1)から(6)は、神田本で漢語動詞読みがされている場合の金沢本と天理本でどう読まれているかということであった。確かに、神田本で漢語動詞読みの場合、天理本でも同じように漢語で読む例が多いという傾向が認められた。これは、天理本が金沢本よりも神田本の読みに近いということもできる。その点からいえば、神田本で和語動詞読みのみのある例が、天理本で和語動詞で読まれているという結果は、金沢本で漢語動詞読みの場合に、天理本に和語動詞読みがあることと矛盾しない。金沢本と天理本との関係というよりも、神田本との関係で見べきなのであろう。恐らくは、漢語動詞形成漢字の訓を見るかぎり、天理本は金沢本より神田本と近く、それに対して金沢本はやや訓に独自性が認められる

といえよう。

(8) 神田本が和語動詞読みで、金沢本に漢語動詞読みと和語動詞読みがある

1「任」(神) タフ／(金) 漢語・タフ／(天) 漢語・タフ

用例数は1例であるが、金沢本と天理本の読みは一致している。

以上、『白氏文集』最古の訓点資料とされる神田本を中心に、漢語動詞形成漢字の訓について、漢語動詞読みか和語動詞読みかという観点から、神田本と金沢本と天理本の三本を比較した。この結果、基本的には、(6)の「神田本が漢語動詞読みのみで、金沢本も漢語動詞読み、さらに天理本も漢語動詞読み」の例が最も多いことが示すように、神田本・金沢本・天理本の漢語動詞形成漢字の訓は漢語動詞読みで一致する傾向が認められる。ただし、三本間で異なる読み方をされる場合も多い。特に、金沢本で和語動詞読みされているところを、天理本では漢語動詞読みがされている例が多い。これは、漢語動詞形成漢字だけから見たものであるが、神田本と天理本の訓が近く、金沢本は神田本や天理本とはやや異なった読み方をする傾向も認められた。

七 漢語動詞形成漢字に付された神田本の第一次仮名・第二次仮名

ここでは、神田本で、漢語動詞形成漢字に対して複数の訓が書き入れられている例について、改めて第一次仮名・第二次仮名という視点を踏まえて、さらにその訓を金沢本・天理本と比較する。神田本の第一次仮名、第二次仮名と、金沢本・天理本の訓との関係を見ることによって、神田本・金沢本・天理本の訓の関係について、訓の系統という観点からさらに深く考えたい。ただし、テキストの写真では、筆者は第一次、第二次の別は判断しがたいので、その判断は、『神田本白氏文集の研究』によることとする。⁹⁾

(1) 神田本の第一次仮名・第二次仮名と金沢本・天理本

神田本に漢語動詞読みと和語動詞読みが併記されており、かつ第二次仮名が存する例は次のとおりである。次の例のうち、「」内に記した訓が第二次仮名である。

1 照(神) 漢語・イキツク・アキトフ・「アキトフ」(合点あり)／(金) イキツク／(天) アキトフ 2 着(神) 漢語・キル(合点あり)・「キル」(合点あり)／(金) キル／(天) キル

3 献 (神) 漢語・「漢語」(合点あり)・タテマツル／(金) タテマツル／(天) 漢語・タテマツル 4 奉 (神) 漢語・「漢語」・タテマツル・ウケタマハル／(金) 漢語・ウケタマハル／(天) 漢語 5 長 (神) 漢語・「マサル」／(金) 漢語・マサル／(天) 漢語・マサル 6 長 (神) 漢語・「マサル」／(金) 漢語・マサル／(天) 漢語・マサル

これを見ると、神田本の第二次仮名は、用例 1・2・3・4 のように、第一次仮名と同一の訓が多く、金沢本と天理本との比較において新たな問題は生じない。ただし、用例 5 と 6 の「長」に関しては、「マサル」という和語動詞読みは第二次仮名であり、これと同じ訓が金沢本と天理本にも見られる。この点について、神田本の第二次仮名と金沢本と天理本の訓との関係を試みたいところであるが、用例数が少ないため、言及できない。全体的に見て、神田本の第二次仮名と金沢本と天理本の訓との間に、関係はなさそうである。

(2) 神田本に付された合点と、金沢本・天理本の訓との関係

神田本の加点状況で、金沢本と天理本の訓と関わる可能性のある書き入れとして、合点がある。以下、神田本に合点の書き入れがある例を挙げて、金沢本と天理本の訓の状況を示す。

1 操 (神) 漢語・アヤツル (合点あり)／(金) アヤトル／(天) アヤツル 2 調 (神) 漢語・トトノフ・シラフ (合点あり)／(金) シラフ／(天) シラフ 3 側 (神) 漢語・ソハタツ・ソハム (合点あり)／(金) ソハム・ソハタツ／(天) ソハム 4 宿 (神) 漢語 (合点あり)・ヌ／(金) イヌ／(天) イヌ 5 休 (神) 漢語 (合点あり)・ヤム／(金) ヤム／(天) ヤム 6 照 (神) 漢語・イキツク・アキトフ・「アキトフ」(合点あり)／(金) イキツク／(天) アキトフ 7 推 (神) 漢語・トル (合点あり)・モハラニス／(金) トル／(天) トル 8 唱 (神) 漢語・トナフ (合点あり)／(金) トナフ／(天) トナフ 9 接 (神) 漢語 (合点あり)・マジハル／(金) マジハル／(天) 漢語 10 録 (神) 漢語 (合点あり)・シルス／(金) シルス／(天) シルス 11 落 (神) 漢語・オツ (合点あり)／(金) オツ／(天) オツ 12 着 (神) 漢語・キル (合点あり)・「キル」(合点あり)／(金) キル／(天) キル 13 献 (神) 漢語・「漢語」(合点あり)・タテマツル／(金) タテマツル／(天) 漢語・タテマツル 14 虐 (神) 漢語 (合点あり)・シヘタク／(金) ソコナフ・シヘタク／(天) 漢語・シヘタク 15 食 (神) 漢語・ハム (合点あり)／(金) クラフ／(天) クラフ・ハム 16 語 (神) 漢語・モノイフ・モノカタリス (合点あり)／(金) モノカタリス／(天) カタラフ 17 勞 (神) 漢語 (合点あり)・イタハル／(金) 漢語・ネギラフ／(天) 漢語 18 持 (神) 漢

語（合点あり）・モツ／（金）漢語・モツ／（天）漢語 19 策
 （神）漢語・シルス（合点あり）／（金）漢語・シルス／（天）
 漢語・シルス 20 哭（神）漢語（合点あり）・ナク／（金）漢語
 ／（天）漢語 21 長（神）漢語（合点あり）・ソヒユ／（金）漢
 語／（天）漢語 22 貢（神）漢語（合点あり）・タテマツル／
 （金）漢語／（天）漢語 23 勞（神）漢語（合点あり）・イタハ
 ル／（金）漢語／（天）漢語 24 祿（神）漢語（合点あり）・ア
 ル／（金）漢語／（天）漢語

漢語動詞形成漢字について、合点の観点からみると、神田本と天理本との結びつきが見えてくる。神田本で合点が付された訓が金沢本に見られず天理本に見られる例としては、用例 1「操」、用例 6「照」、用例 9「接」、用例 14「虐」、用例 15「食」、用例 17「勞」、用例 18「持」がある。これに対して、神田本で合点が付された訓が天理本に見られず金沢本に見られる例はない。神田本で合点が付された訓が金沢本と天理本とどちらにも見られる例を合わせると、神田本に付された合点と、その後の加点点である金沢本と天理本との関係が見えてきそうである。すなわち、神田本に付された合点は、『白氏文集』のその後の訓読にも受け継がれていく訓であるということを示す。この点からすると、先に掲げた用例の 24 例中、21 例に、漢語読みのほうに合点が付されていることは、神田本の加点点時期において、後世に

も受け継がれていくべき漢語動詞読みがすでに多く存したことを示す事例として、注目すべきであろう。

おわりに

今回、『白氏文集』の訓点資料を取り上げ、『源氏物語』の漢語動詞の語幹を形成する漢語動詞形成漢字について、漢語動詞形成漢字の訓の状況を比較した。結果としては、『源氏物語』の漢語動詞の語幹を形成する漢語動詞形成漢字は、訓点資料では、「調」「啓」などを除き、漢語動詞で読まれていた。これは、『源氏物語』の漢語動詞と、訓読における漢語動詞形成漢字の訓とが無関係ではないことを示している。恐らくは、漢文訓読の歴史の中で、漢語動詞として読むという漢語動詞形成漢字の枠組みが経験的に徐々に形成されていったのである。それは、神田本において、漢語読みの方に多く合点が付されていることからいえる。『源氏物語』に使用される漢語動詞は、多くはそのような訓読における漢語動詞読みの経験の中から生まれてきたものであろう。ただ、『源氏物語』で使われている全ての漢語動詞が、訓読を経由して取り込まれたとは言えず、例えば「こらえる」という意味の「念」が漢文に認められないといったこともあり、訓点資料とは関わりなく生まれた可能性もある。この点は、『源氏物語』の漢語動詞成立の複雑さを示すもので

あって、漢語動詞の成立過程については、なお、慎重に検討しなければならない。

今回は『白氏文集』の三種類の訓点本という限られたなかでの考察で、結論としては断定できないところも多い。今後は、訓点資料を増やして、考察する必要がある。底本との関係、各博士家と訓との関係、時代差など、漢文訓読における訓の選択の問題は、なお、考えなければならないことが多い。これらすべては今後の課題とせざるをえないが、今回の考察をとおして、『源氏物語』の漢語動詞の成立過程の一端を、訓読という観点から捉えることができたと考えている。

注

- (1) 卷三の末尾に「天永四年三月廿八日晡時雨申点丁 藤原茂明」とあり、卷四末尾に「天永四年三月廿八日点丁 藤原茂明」とある。太田次男博士は、「卷三・四の本文は同筆ではないので、別々に書写された本文に、両巻を通じて同じ時期に加点されたものである。」とされる。(『神田本白氏文集の研究』太田次男 小林芳規著 勉誠社 一九八二年 一二八頁)

- (2) 川瀬一馬博士の「金澤文庫本白氏文集 複製解説」によれば、「三、四は一筆で、卷四末の長文の跋に拠れば、菅家の傳本を以て書写したもので、正保二年の資慶の奥書の署名の下に「手印」とあるから、資慶の手写本を転写したものであることが判るが、本書の書体そのものは、正保頃の書写と見られる書き振りで、料紙その他もやはりその頃のものとして認めて差し支へないと思はれるので、正保二年に直ぐ続く頃の書写本であろう。」とされる。『白氏文集 金澤文庫本』(川瀬一馬監修 勉誠社 一九八三年—一九八四年)

- (3) 築島裕博士の「訓点解説」によれば、卷第三については、「文集」卷第三には、永仁元年(一二九三)八月十七日鎌倉金剛寿福寺朝譽の書写奥書を有する。(中略)加点的奥書は存しないが、多分書写と同時の加点と見てよいであろう。」とされ、卷第四については、「文集」卷第四の一卷は、奥書によって鎌倉時代正応二年(一二八九)の書写と認められる。全巻に亘って、墨書の訓点があり、本文と同筆であるから、この訓点も同じく正応二年のものとするところが出る。」とされる。(天理圖書館善本叢書漢籍之部第2巻 天理圖書館善本叢書漢籍之部編集委員会編集 一九八〇年 44頁〜45頁)

- (4) 一字漢語動詞形成漢字の用例及び用例数は、『源氏物語大成 索引篇』(池田亀鑑編著 中央公論社 一九五三)を参考にし、筆者が『新編日本古典文学全集』(阿部秋生 他 校注・訳 一九九四—一九九八 小学館)を通読して採取した。

- (5) 前掲の『神田本白氏文集の研究』所収の訓読文(小林芳規博士作成)を通読し、検索した。

- (6) 『神田本白氏文集の研究』所収の本文写真による。

- (7) 用例検索は、注2の文献所収の写真を通読して行った。

- (8) 用例検索は、注3の文献所収の写真を通読して行った。

- (9) 「訓読文では、第一次仮名は無標記で示し、角筆仮名は「」(角)、又は異訓併記の場合は『角、』で示した。第二次仮名及び第三次仮名については、「」に包んで示した。第二次仮名と第三次仮名との区別は認定に困難が多いので特に区別せず、すべて「」に包んで示した。」(『神田本白氏文集の研究』75頁 訓読文凡例)